

知床はアイヌ語で「地の果てる所」という意味である。

動物作家・戸川幸夫が雪に埋もれた知床の番屋でただ一人冬を越す老人の物語を書き、昭和三十五年(四十九年)前に森繁久彌が主演して映画「地の涯に生きるもの」を制作した。

その頃でも北海道は、「津軽海峡冬景色」に歌われるごとく青森から函館への青函連絡船があるのみで、遠い北の大地であった。知床半島は、オホーツク海にのぞむ最果ての土地

であった。

その映画のために森繁が「オホーツクの舟唄」という歌を作詩作曲した。(知床旅情の歌はこのレコードの裏版であり、メロディーは同じである)

一、オホーツクの海原
ただ白く凍て果て命あるものは 暗い雪の下
春を待つ心 ペチカに燃やそう
あはれ東に オーロラ哀し

三、スズランの緑が
雪解けに光れば
アイヌの唄声 谷間にこだます

知床の春は

潮路に開けて
舟人の腕 海に輝く

試みにこの歌詞で森

ない「心の歌」として

三番まで暗記し、隠し歌として披露していたのであるが、十年後に加藤登紀子がありきた

高校生であった私は
当時、森繁ほど歌のうまいのはいないと信じ切っていたものである。
あれから四十九年、今や森繁の「コンドラの唄」でさえ四十代あたりの者でも知りはない。

井護土日記

森繁の「地の涯に

いきるもの」

美和 勇夫

繁節をつけて歌ってご覧なさい。

断然こちらのほうがいいのにヒットしなかった。

私はこれを誰も知ら

りの歌詞の「知床旅情」を歌い始めて、ぶち壊しとなってしまった。

(森繁はオホーツクの舟唄をNKKの紅白歌合戦でも歌ったが、覚えてる人はいないで

星影さやかに 光れ

しょう)

人の世の清き国ぞと
あこがれぬ

さやめくいらかに久遠の光
おごそかに北極星を仰ぐかな

この歌をきいて私は
雄大な地の北大にあこがれたものであったが、今じゃ「北大生」ですらこの歌を知らない者が多い。

「明治は遠くなりけり」どころか、「昭和も遠くなりけり」である。